

善通寺地区におけるキウイフルーツの産地維持のための担い手確保と新品種の導入推進

■ 善通寺地区キウイフルーツ部会 ■

(中讃農業改良普及センター 山地茂伸、○濱野康平、藤原慎也)

●対象の概要

善通寺地区では、昭和45年以降にカンキツ単価が大暴落したことでキウイフルーツへの改植が進み、以後産地として生産に取り組んできた。善通寺地区キウイフルーツ部会は、生産者31人で構成され、主要品種の栽培面積は「香緑」が5.7ha、「さぬきゴールド」が2.0ha、「さぬきエンジェルスイート」が1.0ha(計8.7ha)である。当地区では国内の主要品種「ヘイワード」よりも高単価で販売されている県オリジナル品種を中心に推進することで高収益栽培を可能としている(表-1)。

表-1 令和3年度産キウイフルーツ販売単価(善通寺地区)

品種	販売数量(kg)	販売高(千円)	単価(kg/円)	前年比(%)
香緑	47,308	38,570	815	107
さぬきゴールド	24,510	27,399	1,118	112
さぬきエンジェルスイート	11,903	13,387	1,125	106
讃緑	552	398	720	86
ヘイワード	2,287	1,451	634	117
計	86,560	81,204	938	110

●課題を取り上げた理由

当産地が抱える問題として、生産者の高齢化による将来的な担い手不足が挙げられる(図-1)。現在、部会に所属する生産者の半数以上は70歳以上であり、後継者が決まっていない園地も数多く存在する。

一方、当地区のキウイフルーツは知名度が高く、新規栽培に興味をもつ生産者はいるものの、開園に適した土地の確保・整備の遅れが課題である。また、資材費も高騰していることから、新規就農のハードルが高くなっている。

また、既存の園地も老木化が進んでおり、収量の低下により改植が必要である。

そこで、産地維持のための担い手育成に重点を置いた普及活動に取り組むとともに、キウイフルーツ新品種「さぬきエメラルド」の導入推進をあわせた老木園地の改植を推進した。

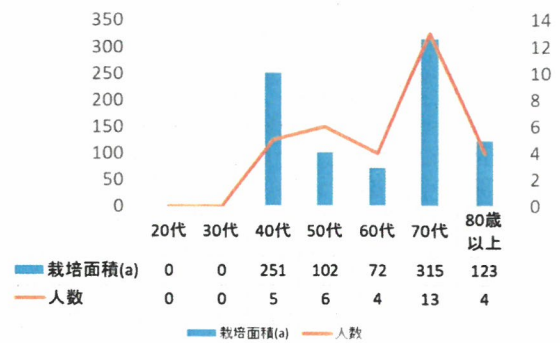


図-1 善通寺地区キウイフルーツ部会の年齢構成

●普及活動の経過

1 「さぬきエメラルド」の普及に向けた取組み
「さぬきエメラルド」は農業試験場が育成した黄緑色の果肉をもつ新品種である。当品種は食味良好で、貯蔵性の高さが特徴である。国内産の黄肉系キウイフルーツが品薄となる年明け以降の販売が見込まれており、「さぬきゴールド」と「香緑」との間でリレー販売が可能となるため、当産地への導入が期待されている。

同品種の早期導入を図るため、部会員を対象に検討会を開催し、品種特性を説明した。また、産地に設置した展示場で生産した果実を用いて参加者に試食を行い、品種更新を提案した。



キウイフルーツ新品種「さぬきエメラルド」

2 担い手の確保・育成

高齢化が進む当産地では園地貸借の相談が増

えており、園地を新規就農者に紹介することで将来的な担い手となることが期待される。そこで、新規就農者からの相談の際には普及センターが積極的にかかわり、ベテラン生産者とのマッチングを行うとともに円滑な新規就農へのサポートを行った。

●普及活動の成果

1 新品種「さぬきエメラルド」の導入

試食会での生産者の意見について、食味に関しては「酸味が少なく若い消費者が好む食味である」、「甘さが濃厚であり、香川県の新しいキウイとして人気が出そう」などといった意見があった。栽培性については、「枝折れが少なく香緑よりも増収が見込める」、「導入を検討しているが、さぬきゴールドと開花・収穫時期が重なるので、労力の分散が難しい」といった意見が挙げられた。

「さぬきエメラルド」の導入推進を行った結果、本年度の改植には、現地試験ほ場の規模拡大と合わせると部会員4名の生産者からの要望があり、計20a程度の新植・改植を行った。

さらに、来年度以降は改植事業が適用可能となるため、すでに部会員3名が新植・改植を検討している。改植の提案は、主に老木化により疎植となった「香緑」の園地を対象に行っている。果樹棚の空いたスペースを有効活用することで、その園地の収益性が高まるとともに、将来的な園地継承の際にも荒廃することなく担い手に貸し出すことが可能となる。



さぬきエメラルドの改植状況

2 担い手の就農サポート

部会員に、新規就農者に向けた園地継承について周知を行ったところ、65aの園地が候補に挙げられた。園地を確認すると就農直後から十分な収益を見込めることから、Uターン就農を行う20代の就農希望者に紹介した。JAインターン制度を活用し、1年間の研修期間を経て就農予定であり、

現在は普及センターと就農後の品種構成の検討を進めているところである。



ベテラン生産者から新規就農者への園地継承

また、資材高騰による初期投資を少しでも軽減するため、気候変動によって園地条件が悪化し、廃園となった園地については棚資材を有効活用し、別の土地での移築を提案している。

部会内でも新規就農者の指導・教育を行うことで一致しており、普及センターでは地域の生産者と協力し、優先的に指導に取り組んでいきたい。

●今後の普及活動の課題

産地の中心品種の一つである「香緑」の老木化が進み、収量が低下していることから、引き続き新品種「さぬきエメラルド」への改植を推進していく。

新規就農者に対しては、の重点的な指導を行い、早期成園化を進めていく。生産者の所得向上を図るため、夏季の新梢管理、剪定など栽培管理に関する巡回指導を強化実施し、園地状況の把握に努めたい。

また、後継者がいない生産者には、園地の貸し出しについて積極的に提案し、産地の栽培面積の減少を防ぎたいと考える。当地区では、市とJA、普及センターが協力して将来的な担い手の育成・確保に乗り出しており、地区外からの部会加入も増加傾向となっている。今後さらに情報共有を密に行い、円滑な就農をサポートしていきたい。